

武蔵野日曜聖書講筵

女性の力

――コリント前書第13章8～13節――

1994年1月16日

小池辰雄

兄の死と母の失明 女性の愛の力 母の力 天国は女性上位 大いなるかな愛の心や 十字架
の棄身の愛 神聖なる復讐

【コリント前13】

……⁸愛は長久^{いっ}までも絶ゆることなし。然れど預言は^{すた}廃れ、異言は止み、知識もまた^ま廃らん。⁹それ我らの知るところ全^まからず、我らの預言も全^まからず。¹⁰全き者の来^{きた}らん時は全からぬもの^{きた}廃らん。¹¹われ童子^{わらべ}の時は語ることも童子のごとく、思うことも童子の如く、論ずる事も童子の如くなりしが、人と成りては童子のことを棄てたり。¹²今われらは鏡をもて見るごとく見るところ^{おぼろ}朧なり。然れど、かの時には^{あわ}顔を對せて相見ん。今わが知るところ全^まからず、然れど、かの時には我が知られたる如く全^まく知るべし。¹³げに信仰と希望と愛と此の三つの者は限りなく^{のこ}存らん、而して其のうち最も大なるは^{おお}愛なり。

●兄の死と母の失明

私の母は1957年1月19日に召天しました。私が5歳の時に父は亡くなりましたので、私は父をほとんど知らない。私は全く母に育てられた。母の恩は、私は言葉で表現することができません。それで、今日は特に母を覚えて、皆さんにお話をしたいと思う。

私はまだ小学校に入らない前に千駄ヶ谷に住んでいました。お茶の水のそばの弓町に住んでいたのが、遠くなったので、幼稚園にも行けなくなりました。母はお茶の水女学校の先生をして、国語と数学を教えていた。この母が帰ってくるのが待ち遠しいわけです。母の帰ってくる頃には、私は門辺に出て待っていて、母の姿が見えると、走って行って抱きついた。お母さんは、存在そのものが私にとっては一切であった。そういう昔を今でも鮮やかに思い出します。小学校時代は、小石川の林町18番地という所に移ったんですが、母はお茶の水の先生をずっと続けて、私たち三人の男の子と二人の女の子を、女学校の先生をしながら育ててくれたわけです。

長男の小池政美がもの凄く英語ができるのでロンドンに行くはずだったのが、北京に移された。これは上役が自分の子分を兄の代わりに切り替えた。それで、兄は北京に務める



ことになって、北京で腸チフスで仆れた。27歳で仆れました。母は次男と一緒に見舞いに行つて、帰りは遺骨をかかえて帰つてきた。多年の過労と悲嘆のために、帰りの黄海の上で母は失明してしまった。惨憺たるものです。兄は死ぬ、母は失明する。私は母と一緒に叔父さん叔母さんの所にやつかいになる。そういう悲運をどん底まで味わされた。私はもちろんもの凄く勉強していましたから、自信があつたから一高に入りたかつた。けれども、その叔父さんの息子がそれだけの実力がなくて、水戸の高等学校を受ける。それで、

「辰雄が一高を受けては……」

と言つて、母が遠慮して私を水戸に受けさせた。私は非常に癪しやくにさわつていた。水戸をほとんど私はトップで入つたから、一高にも入れた。それがマイナスの自乗で、水戸では病氣にかかつて一年休学。惨憺たるものです。一高に入っていれば、そんなことはなかつたはずなんです。そういう情けない運命を辿らされた。

●女性の愛の力

少し身体がよくなつて、土曜日曜に帰つてきては、内村先生の聖書講演を聞きに行った。私は、兄貴が内村鑑三先生の話を知つていたことを知つてますから、それで、信仰に入つたわけです。マイナスの自乗だつたけれども、一つだけプラスになつたのは、とにかく内村先生を通して信仰の世界に入つた。兄が内村先生の本や雑誌を持っていたから、私はそれを読んでいた。そんなことで、信仰には入りましたけれども、とにかく、一高に入れなかつたのが残念で、私は兄の墓前で泣いた。

お母さんは失明してしまうし、兄は居なくなつてしまった。けれども、私にとってはこの母は私の生命の一切であつた。

「女性の力」

とはもちろん、これは愛です、

「愛の力」

です。ゲーテの『ファウスト』の終りの方は、

「永遠に女性的なるもの」

我らを引きて行かしむ」

という句で終わっている。これがあの有名な『ファウスト』の最後の句です。

「永遠に女性的なるものが我らを引きて上げていく」

という。ダンテもそうです。ベアトリッチェが彼の力になつた。ゲーテももちろん幾人かの女性が相継いで彼の力になつた。女性の力というものは愛の力です。男はすぐ争つたり喧嘩したりで、腕力ですけれども、女性は愛の力です。愛は最大の力をもっている。コリント前書13章でもそうです。キリストの愛は極まつて十字架となり、そしてまた、復活の永遠の生命となつた。最後にキリストを愛したのはマグダラのマリヤです。彼女は非常に



高価なナルドの香油の壺を割って、全部キリストに注ぎかけた。キリストは、

「この女のしたことは、福音の伝えられる所いずこにおいても語り伝えらるべし」

と言われた。マグダラのマリヤが最後に、全身の愛をもつてキリストにナルドの香油を全部注いだ。これも愛の力です。キリストは非常に喜ばれた。それは自分が十字架に架かることを予知して、

「私にその吊いの油を注いでくれたのだ」

とキリストは言われた。そういうわけで、女性の力は愛の力です。男は強そうだけれども、本当はダメなんです。すぐ戦争をしたり、個人的にも社会的にも国際的にも争ってばかりいる。けれども、本当の平和ならしむる者は女性なんです。隠れた本当の力は女性にある。歴史を導いているものは実は女性の愛の力なんです。それでなければ滅びてしまう。

●母の力

賀川豊彦は妾めかけの子です。しかし、その妾は素晴らしいお母さんです。そういう人を通してても賀川さんみたいなのが現れてきた。その妾という女性は本妻よりも素晴らしい女性なんだ。それで、却って賀川先生は良かったわけです。運命というものは妙なものだ。賀川さんを賀川さんたらしめたものはそういう女性だった。

私はお母さんを思わないでは、在り得ない人間です。それで今日は特に『女性の力』と題してお話した。戦場でも戦士が死ぬ時には、「お父さん」とは言わない。

「お母さんー」

と叫ぶそうだ。歴史をどん底で担っているもの、在らしめているものは女性なんだ。男は偉そうなことを言っているがダメなんです。そういう意味で、文学の世界でもその力となっているものは、ダンテでもゲーテでも、みな女性です。私は今日は特に、そういう意味で、母のことを思いながら、皆さんにお話しせざるを得ない。それでコリント前書13章を特に読ませていただいたわけです。

キリストは「父」と言うときには、イエスにとつては「父」は天の神さまで。神さまが父で、ヨセフではない。ヨセフのことはひとつも語ってない。みんなこのマリヤです。マリヤは聖霊によつて身ごもった。それで、イエスが現れた。このマリヤという女性を通して聖霊がはたらいた。父なる神、子なるキリスト。在らしめたものは聖霊の力であつて、それを媒介したものはマリヤという女性なんです。ヨセフの存在は殆ど考えられない。だから、十字架のキリストが、

「この母を頼むよ」

とヨハネに言われた。それ位、イエスにとつてもお母さんは特別な存在です。もちろん、彼は力を父なる神からいただいていますけれども。父は神さまだから。それを媒介したの



は聖霊だから。そしてマリヤという女性を通して、そういうことになっている。だから、それを見ても、実は歴史を導いている隠れたる力は女性なんです。男は戦争でひっくり返して壊したりなんかしている。女性の方々は、

「戦争はダメだ」

ということ、世界中の女性があいたずさえて、世界を平和ならしめるようにしたらいい。自然界でも、もし自然界に花がなかったら、全く殺伐たるものです。人間界の花は女性です。そういうことで、我々を本当に活かすもの、在らしめているものは実はこの女性の力である。それも愛の力です。

生涯を、私を育ててくれた母のことを、幼稚園から大学の卒業までずっと思いうかべますと、涙が流れる。本当によく苦勞してくれました。だから、過勞と悲しみで最後に失明してしまった。私にとっては、女性というときにはもう、母しかない。母を思う。みな母の力なんです。

●天国は女性上位

皆さんは、ここにいらつしやる女の方もみな、そのような存在であります。第二の国民の本当の力は女性である。

だから、教育の上でも、先生方は本当の教育をしようと思ったら、その子供のお母さんと話さなければいけない。お母さんと話をしないと本当の教育ができない。そういうことを自覚している教育者がどれほどいるか知りませんが、昔は「父兄会」と言った。冗談言っではいかん。兄ではない。これは「父母会」です。母という字はもととおっぱいの形からできている。乳房は生命の泉なんです。

『永遠の乳房』

というのを賀川豊彦が書いている。

私たちは、実は母なる存在がいかに本当は自分を育ててくれたか、母の恩を忘れたらおしまい。女性の力は愛の力です。特に、私は父を知りませんから、お母さんの存在が非常に大きな存在でした。もう目に見るように明らかに映ってきます。小さい時からずっと育ててくれた。その愛も、なかなか厳しきももっていました。時々、えらく叱られたりしました。お母さんの私を呼ぶ声まで、今でも響いてくるように感じる事ができる。

話は私的な内容ですけども、単に私的ではなくて、あなた方お一人お一人の、

「女性の愛の力というものはどれほど尊いものであるか」

ということを自覚していただきたいと思います。

こういうドイツ語の詩がある。

「私は愛の力に祈り入る。

それはイエスにおいて現れたところの愛の力。」



私はこの自由なる衝動に自分を委ねる。

その愛の力でこの虫けらみたいな私が愛されたから。

自分のことを思っかわりに

愛の大海の中に自分を躍り入らしめる。」

本当の人間、これは男であろうと女であろうと、本当の人間は愛のひとです。愛がなければ人ではない。愛とは人を助けること。愛するとは具体的に人を助けること。ただ感情的に愛しているということではない。具体的に人を助けなければ愛ではない。賀川さんはそういう愛の人でした。

それが母であろうと、奥さんであろうと、或いは単独の方であろうと、いろいろな境遇がありますけれども、しかし、女性というものはそういう愛の力である。男は争って相手を滅ぼしたりして、悪いんだ。まず、地獄に入らなければならぬ。いきなり天国に行けるのは女性の方です。天国で上位なのは女性です。キリストの回りにはそういう女性が一杯いるだろうね。

●めぐみのひかりは

本当の人間は、男性であろうと女性であろうと、その中に、パウロがコリント前書13章で、「この愛がなかったならばすべては空しい」

と言うところの愛をもっている。信仰の戦士パウロがコリント前書13章では徹底的に愛のことを称賛している。パウロはその愛において女性を思っていたかは知らん。キリストの愛でしようけれども。パウロは結婚していたか独身であったかは分からない。多分彼は独身だったであろうね。この信仰の戦士パウロが、徹底的にコリント前書13章で愛を語っている。それはキリストから来ている愛でしようけれども。キリストが一番感激したのはマグダラのマリヤの愛であった。最後に、キリストに一番従ってきたのも女性なんです。十字架の回りにやってきたのは女性です。何といっても、女性の愛がなかったら、社会も国家も殺伐たるものです。そういう意味で、実は愛が一番の力である、本当の人を救うところの、人を助けるところの力であるということを、女の方々は太いに自覚していただきたい。1月19日が近づいたものだから、つい私は母のことを想いながら、こういう話になってしまった。しかし、それは何も母のことではなくて、ゲートル

「永遠の女性的なるもの

或いは「永遠の女性」と言ってもいい、それが

我らを引き上げていく」

ということ。大詩人ダンテもゲーテも皆そのようにして女性の大事な尊さというものを歌っているわけです。

トルストイの『復活』という小説の終りの方に出ているカチューシャという女性がいる。



あれもシベリヤに流されながら、彼女がいかに実は素晴らしい愛の女性であったかということが――島村抱月の中村晋平作曲の有名な歌があるが――それでも感じます。

育てる上でも、教育の面でも、社会的な意味においても、女性が男性と争ったらダメです。女性はどこまでも隠れた力としてあることが大事です。

「愛は最大の力である」

これはコリント前書13章のパウロのこの言葉が一番よくそのことを証明している。コリント前書13章は非常に大事な章です。

讃美歌87番の「恵みの光は」は実は私の母が愛唱していた歌なんです。

「めぐみのひかりは わがゆきなやむ

やみ路を照らせり 神は愛なり。

われらも愛せん あいなる神を」

母は失明していたから、特にこの歌が好きだった。母は失明したことを一遍もかこったことがない。一遍も愚痴を言ったことがない。私はこれには本当に参った。目が見えなくなつたことを嘆いたことがない。そして

「神は愛なり」

と歌っている。この四節全部、素晴らしい歌です。

私は母がこれを唱うのを聞いていて涙した。

●大いなるかな愛の心や

榮西禪師が「大いなるかな心や」と、心というものはなんと偉大なものかと語っている。

「大いなるかな心や。

天の高き極むべからず

而るに心は天の上に出づ。

地の厚さ測るべからず

而るに心は地の下に出づ。

日月の光は踰ゆべからず

而るに心は日月光明の表に出づ。

大千沙界は窮むべからず

而るに心は大千沙界の外に出づ。

それ太虚か、それ元氣か。

心は即ち太虚を包んで

元氣を孕むものなり。

天地我を待つて覆戴し

日月我を待つて運行し



四時^{しじ}我を待つて変化し
万物我を待つて発生す。

大いなるかな心や。」

と、榮西は言ってますが、この心が実は愛の心です。その心の中心は愛です。そういう広大なる、また深刻なる愛です。まだ榮西はその愛まではつっこまなかったけれども。お釈迦さんが慈悲といった。慈悲とか慈愛とかいう。お釈迦さんの世界でも、キリストの世界でも極まるところは全部、愛です。それで、人間界で何といつても愛の存在は女性ですから。ラファエルのマリヤの絵があるが、まことに素晴らしい。あれ（集会所に懸けてある絵）は十字架のキリストを仰いでいるマグダラの絵です。カルロ・ドルチというイタリヤの画家が描いた『マグダレーナ』という絵です。ヨハネ伝19章25節。十字架のキリストの足にしがみついているのもマグダレーナです。有名な絵がある。

ドイツの教会に行きますと、一番少ないのが若い男性。女性は若い方も年取った方もかなりいた。結局、女性の方が多い。ドイツの教会でもやはりそうだ。若い男性が一番ダメなんだ。信仰の世界は、「依^より頼む」というでしょ。

「神さまやキリストに依り頼むなんて情けない」

と、若い男性はそう思う。だから、

「信仰なんか……」

と言って、信仰の世界を相手にしない。

私にとっては信仰は信交になる。仰いでばかりいたらダメです、キリストと一つにならなければ。信^いじ交^あわる世界です。

「我がキリストか、キリストが我が」

という世界です。これは一如の世界。この如という字は――「即如」という言葉があるでしょ――「如し」ではない。これは

「それと一つになる」

ということです。「一如」とは、

「それと区別ができない一体の世界」

です。信交の世界はこの一如でなければダメです、即如でないと。そういう世界に女性の方が入りやすい。男はなかなかそれができない。

是非、この女性の力ということを、コリント前書13章をよくおぼえてください。これは暗記するくらいに。パウロというのはやはり素晴らしい使徒だね。キリストにひっくり返されて、回身して、

「我が眼^{うづめ}より鱗^{うろこ}の如きもの落ちたり」

と。ヨハネは愛の人でパウロは信交の人だけれども、その信交の人パウロがコリント前書13章を書いているんだから。そして、今度は14章で愛の賜物のことを書いている。15章へ



行くと、復活のキリストのことを書いている。このコリント前書13章から15章までは素晴らしいところだ。パウロは大変なひとだ。

●十字架の棄身の愛

8 愛は長久^{いっ}までも絶ゆることなし。然れど預言は^{すた}廃れ、異言は止み、知識もまた^た廃らん。9 それ我らの知るところ全からず、我らの預言も全からず。10 全き者の来らん時は全からぬもの^た廃らん。11 われ童子^{わらべ}の時は語ることも童子のごとく、思うことも童子の如く、論ずる事も童子の如くなりしが、人と成りては童子のことを棄てたり。12 今われらは鏡をもて見るごとく見るところ^{おぼろ}臆なり。然れど、かの時には顔を^{あわ}対せて相見ん。今わが知るところ全からず、然れど、かの時には我が知られたる如く全く知るべし。13 げに信仰と希望と愛と此の三つの者は限りなく^{のこ}存らん、而して其のうち最も大なるは愛なり。

しかもその愛は棄身^{すてみ}の愛です。キリストの十字架が、贖罪の愛が棄身の愛です。イザヤ書53章。ナルドの香油をぶち割って注いだのは棄身の愛の姿です。

私はよく無^なということ言うけれども、正に無我なんです、棄身なんです。無とは無我のこと。我無き世界、神秘境、神秘の境地です。

「世もなく、我もなく、ただ主のみ在ませり」

という讚美歌がある。だから無者です。キリストは正に無者の最たるひと。キリストは神一切で、自分なんか無い。無我。それが棄身の愛なんです。無我で相手の中に自分が溶け込んでしまっている。それは神秘の世界です。本当の愛の世界は非常に神秘的なんです。そういう境地を語っているのが中世のエックハルトだ。そしてその弟子のゾイゼ。ゾイゼは別の発音ではスーシーとかいう。

ジャン・ヴァルジャン（『レ・ミゼラブル』）の中に出てくるあの女性（少女コゼット）も素晴らしいね。それから、ノヴァーリスのゾフィー。想いだすと、いろいろな例がありますけれども。だから、ゲーテの、

「永遠に女性的なるものが我々を引き行かしむ」ということ。

「我々を引き上げていくものは永遠の女性だ」という。

ホイットマンというのは面白い人だな。アメリカの詩人で非常に自由奔放な人です。その言葉に、

「私は矛盾に満ちている人間だ。何となれば、私は偉大であるから」

とある。内村先生がちよつとそういうところがある。昨日言ったことと今日言ったことが全く違うようなことを言っている。矛盾（コントラディクションズ）といっても、これはデタ



ラメではない。今日の瞬間、昨日の瞬間、明日の瞬間、その瞬間ではのつぴきならないことを言っている。それを比べると矛盾している。けれども、その瞬間においてはみな本のなんです。瞬間において本当のことを言っているものは、たとえ前後が比べてみたら矛盾しても、それはデタラメではない。こういう矛盾が偉大であるという。

「先生は昨日あ言ったではないか。けれども、今日は違うではないか」
なんて。それぞれ違うんです、その時その時に本当のことを言っていると。しょっちゅう同じパターンでものを言っているのではないから。

「それは、私は偉大であるから」

と、ホイットマンが言っている。ホイットマンというのは、面白い、これが詩かと思うような詩を書いている。散文だか詩だか分からないようなものを。非常に自由奔放な人です。アメリカでは型破りな詩人だ。

「私は矛盾に満ちているから」

と。こういう矛盾はデタラメではない。本当は大調和をなしている。「コスモス」(宇宙)なんだ。大宇宙は矛盾しているように見えるけれども、大調和をなしている。

キリストの聖霊の世界に入ると、これはみな分かる。聖霊というのは凄いんだから。聖霊の内容はもの凄い豊富な内容をもっている。裁かない。全部包摂してしまう。普通、「聖霊」という言葉が非常に狭く考えられているけれども、そうではないんだ、私が捕まえさせられている聖霊は。「聖霊」なんて言わないで、

「キリスト霊」

でも、

「宇宙霊」

でもいい。

ベートーヴェンでも、ゲーテでも、実に多様性でしょ。もの凄い多様性をもっている。偉大な人間はみな多様性をもっている。ベートーヴェンなんてのはあらゆる音楽をやっている。ゲーテもあらゆる文学を。ユーゴーでもそうでしょ、シェークスピアも。ミルトンはそこまで大きくないね。ブラウニングは凄い。イギリスではブラウニングだな。ドイツではゲーテだ。フランスは多分、ユーゴーでしょう。『レ・ミゼラブル』なんて凄いもんな。ロシアではドストエフスキーだろうね、トルストイでもいいけれども。ドストエフスキーはちょっと暗すぎるけれども。

今の若い人はそういう古典を知らないね。先生方の指導が悪いんだ。古典を読まなければダメだ。ヒルティも言っている、

「すべてから古典を読むべし」

と。ラテン、ギリシアの古典。ソポクレスの『オイディプス王』とか、ホーマーはもちろん。



●神聖なる復讐

私にとっては、母は特別な存在です。その次は兄小池政美。私は大きな詩を書いて、

「神聖なる復讐」

をしてやる。前に、こんな詩を書いてあった。

「大正の世に兄と我は

同心町にて共に暮らせり。

兄はいつも主に在りてぞ

母を助けて雄々しかりし。

彼の任地はロンドンなり

されど、北京に急変せられたり。

彼火の如く力を尽くし

非凡の才を顕したり。

彼は知れり、この変転サタンの詭計と。

されど、忍ぶ。

母は今や兄をなくす。

その悲しみはいかばかりぞや。

遺骨抱き母は海に失明したるぞ。

何たる無情。

母の十字架、母の失明

げに我が生涯は弔戦なり。

聖書伝道、町に山に

五十年峠の秋のこの日

受けし恵み想いかえし

聖前に平伏し独り涙。

主キリストは我を愛し

御霊の力を与え給う。

世は捨つれど君は棄てず

悲願を必ず遂げさせ給う。

預言者、使徒、我も燃えて

炎の告白、詩とならん。

聖名に在りて神のドラマ

生命の限り歌い尽くさん。」

ええ、なにしろ、やりますよ、絶対。

